

あぶら通信

第21号 1999年12月 あぶらむの会発行
〒509-4121 岐阜県吉城郡国府町宇津江
TEL 0577-72-4219 FAX 0577-72-4494
メールアドレス abram@mb.i-chubu.ne.jp



作者 河合 理子



子供のころ、「西暦2000年を自分は生きて迎えられるかなァー」と指を折ってみた。50才台前半なので健康ならば生きて迎えられるだろうなど安堵したことを思い出す。その2000年まであと一ヶ月、何か心に一つの区切りと変化がおり、心新たに新しい一歩が踏み出せると期待している自分がいます。しかし、そんな私を冷笑するかのよう、本棚の片隅に連なっている書きさしの日記帳。どれをめくっても白々としたものばかり。きっと大きな節目の2000年を迎えても、このどうしようもなさ変わらないことでしょう。そんな自分なのに、何か新しい変化を期待しているから不思議です。

あぶらむ通信をお手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。99年も年一回の通信となってしまいました。お赦し下さい。

9月16日、飛驒地方は台風15号の影響で大きな水害に見舞われました。ありがたいことにあぶらむの里周辺は大事には至らなかったのですが、裏山の畦畑から河合村、宮川村及び奥美濃地方にかけては激甚災害に指定されるほどの激しいものでした。ここは山里ですので激しい雨には慣れているのですが、今回はあれよあれよという間に水かさが増え、あぶらむの宿からは見えない宇津江川が、一部道路にまであふれ出し、宿に居ながらにて激流が見えるほどの増水でした。

あぶらむの里から徒歩10分ほどに県立自然公園宇津江四十八滝という名勝がある。そこから流れ出る宇津江川を、より美しく見せようと人間の手で石が配置され、川が庭園のようになっていた。そんなに手を加えなくても、もっと自然のままであった方がよいのと思っていた私でした。それが今度の増水で全ておし流され、荒々しい川相に一変してしまっ。「人間の手であまり俺をいじくりまわすな！」という自然の叫びのように思われた。

川は蛇行することにより水量調節をし、水生物を育むといわれます。それを人間側の都合で流れが変えられ、護岸堤防も生命を育むことのないコンクリートにされていくのです（最近は何見直されてきてはいますが）。増水し、暴れ狂ったような川を見ていたら、川は自然の理にかなった元の状態にもどろう、もどろうとしているように思われた。「自然」ということは、健康な状態にもどろうとする行為、意志であることのように私には思えた。「水が激しく流れる（動く）」ということ、健康への回帰の印なのではないだろうか。

最近、私を捕えて離さないことの一つに、聖書の「ベテスダの池の物語」がある。神のあわれみの場所という意味を持つベテスダの池の周りに、病や障害を負った人々が沢山集っていた。なぜならば、「彼らは水の動くのを待っていた」のです。それは、「時時、神の御使がこの池に降りてきて水を動かすことがあるが、水が動いた時まっ先に池にはいる者は、どんな病気にかかっても、いやされるからである」。この「水が動く時に癒しがおこる」という言葉に、私はいろいろと考えさせられることがあるのです。

心のバランスを崩したり、拒食過食、自殺未遂等々、心の問題をかかえてあぶらむを訪れる若者を見て感じることの一つに、「心の動きのなさ」というものがある。動きのなさというよりも、かたく閉ざしているといった方が適切かもしれない。いろんな苦しみや悩みのため、自己防衛として自分の心をかたく閉ざしているのかもしれないが、それにしても「動きのない心」は、本人をさらなる苦悩に追い込むばかりで、そこからは何も生まれぬように思う。

先日、解剖学の第一人者、養老孟司氏の本を読んでいておもしろいと思ったことがあった。これまで数えきれないほどの人体解剖をしてきた氏にも、気持ちの悪いと思うもの、

不気味とを感じるものがあるとのことなのです。皆さんはどこだと思われませんか。それは「第一に手。第二に顔、特に目」だそうです。内蔵など他の臓器や器管には特別なものは感じないそうですが、手と目には不気味さを感じるのです。それは、「目は顔の中で、一番表情が豊かな部分である。その目が動かないと、奇妙な感じがする。それが、『気味がわるい』という感覚につながるのであろう。手もまた、さまざまな表情をもつ。だからデッサンや彫刻の題材になったのだと思われる。私たちは無意識のうちにその表情を読み、相手とのコミュニケーションをはかるのです。ところが、その手、その目が動かないとすれば、表情の読みようがない。読めない表情は、とても不気味なのである」、そう語るのです。

私は「こころ」も同じであると思う。いや、こころは手や目以上に躍動感にあふれ、表情そのものです。このこころが動きを失い、かたく閉ざされているとするならば、それは死に近い深刻な状態といわなければならない。だから、私たちが癒され、健康であり続けるということは、私たちの心が常に動き、感じること、ささやかなことへの感動とそれに対する感謝にあると思うのです。

先日、あぶらむにとって、とっても嬉しいことがありました。ネパールの旅と一緒にしたAさんが、あぶらむの会員になってくれたのです。彼はこの数年、心のバランスを崩し、家にとじこもりがちでした。見知らぬ人達と異国の地を旅することは、彼にとってとっても苦痛を伴うことであったようですが、彼はおもいきって第一歩を踏み出したのです。家族や友人、そしてネパールの大地が彼の心を暖めたのでしょうか。彼の心は動き出し、新しい仕事を心得働き始めたのです。この秋、久しぶりに見たAさんは、別人のように生き生きとした顔をしていた。彼の心が動いた時、そこに癒しがおこったと私は強く思うのです。その彼が、あぶらむの会員になってくれたことは、私たちにとって大きな大きなプレゼントでした。

もうすぐ訪れてくる西暦2000年、あぶらむも「旅人の宿」ができて10周年の記念の年を迎えます。この与えられた空間が、「人生の良き旅人づくり」の場となり、ここを訪れる人々や生活を共にする若者の「心が動く」場となるよう、一層の精進を重ねていきたいと思っています。

皆様には、どうぞよいクリスマスを、そして、よいお年をお迎え下さいませ。平安をお祈りいたします。

’99年12月

あぶらむの会 代表 大郷 博

あぶらむホームページ開設のご案内

皆様に少しでも早く、あぶらむの出来事や催もの、四季折々の風景などをお届けしたいと、今度、横浜在住の斉藤保兄のご協力により、ホームページを開設することになりました。今はまだ、工事中が多い内容ですが、徐々に充実したものにしていきたいと思っていますので、どうぞごらん下さい。

あぶらむホームページは

<http://www.i-chubu.ne.jp/~abram>

飛騨から4時間、隣国韓国の人々の心

99年10月、「宗教と文化」というフォーラムに出席のため、2年ぶりに韓国ソウル市を訪ねた。戦後50年余、韓国内では日本の歌舞、映画等は上演禁止されてきたが、本年9月15日をもって解禁された。この記念すべき韓国での日本の歌第一号は、「花」で有名な沖縄の民衆歌手喜納昌吉さんだった。ロシア語、中国語、韓国語、日本語の入り交じった難解なフォーラムよりも、喜納さんの歌はストレートに国籍を越え、人々の心に伝わってきた。私はどちらかといえば喜納昌吉さんのおかげで、このフォーラムに参加したようなものだった。

97年夏、当会会員洪沢一郎牧師が韓国聖公会の牧師さん4人をあぶらむへお連れになった。わずかな滞在だったがすっかり気に入っていただき、98年夏には韓国の教会の青年キャンプをこのあぶらむの里で催したいという話になった。その会話の中で、「ところであなたは韓国へいらしたことがありますか」とたずねられた。私は訪ねたい気持は山々だが、過去のことを思うとどうしても敷居が高く、訪ねにくいということ話した。そうしたら、そんな心配は無用、私たちが迎えるから是非ともいらっしゃいということになり、97年10月初めての訪韓ということになった。

空港に着いておどろいたのは、はぐれ鳥牧師の私なのに、教会の重だった人が専用通訳をともなって出迎えて下さった。最初の夜はソウル教区主教（監督）の歓迎夕食会、このはぐれ牧師にとってはあまりものことなので緊張してしまっただが、しかし、仰々しいのもその一回限り。その後は食べて飲んでのびっくりするような日々の連続だった。

「大郷さん、鰻好きですか。天然ウナギの美味しいところがあるのですが」、「ええ、ウナギは私の大好物です」。私の韓国での地獄のような苦しみの第一歩は、金在烈牧師とのこの会話から始まった。ジンギス汗鍋のようなもので素焼されたウナギを焼き、キムチのような辛子ダレをつけて食べる。身厚のとってもおいしいウナギだった。特上ウナ丼でも4～5切れしかはいてない日本のウナギ、もうそれだけ食べれば満腹です。しかし、韓国のもてなしは、一ケタちがうのです。私の取り皿に盛られたものが少なくなるやいなや、すぐに第二弾三弾と私の皿がウナギで山盛りになるのです。30数切れほど食べたでしょうか、私は失神寸前でした。

このウナギが消化しないうちにもう夕食の時間となった。「大郷さん、今日の夕食、車エビを用意しているのですが、お好きですか」、元来食意地の立っている私、身のほど知らずにも「エビ、大好物です」とつい口走ってしまったのです。ナベにたっぷり塩を入れ火にかける。あつく焼けた塩の中に活エビを入れるのです。一瞬とびはねたエビはみるみるうちに赤くなり、やがて塩味のきいた焼エビの出来上りです。これがまた実に美味なのです。2尾3尾と最初はお昼のウナギのことを忘れて食べ始めたのですが、気がついた時はもう手遅れ。昼間の再現となり、食べた車エビ30数尾、この時以後、私の下腹部は満月となり、以後、二度と欠けることはなくなったのです。

そんな日々の3日目、私は教会の信者さんの家にホームステイすることになった。夕食前に着く予定が交通渋滞にまき込まれ、着いたのが0時近かった。しかし、そんな遅い時間にもかかわらず、10数名の人々が私を待ちうけていた。大きな食卓には料理がびっしりと用意されていた。食べて、飲んで歌っての宴が午前3時半まで続いた。私は意識不明寸前、お開きという言葉と同時に泥のようにねむってしまったのは言うまでもありません。

翌日目がさめると、私の枕元に袋に入ったままの真新しい品々が置かれてあった。タオル、歯ブラシ、シャツ、パンツ、そしてポロシャツと。私のために用意してくれていると察しはついたのですが、家人から何も言われてないし、手をつけることなく身支度をすませた。

朝食がまた大変、大きな大きなテーブルに朝からご馳走がびっしりとならべられているのです。夜を徹して作ったものでしょうか、胸が一杯になりました。しかし、おなかの方は食べないうちから満腹。申し訳ないのですがとてもじゃないけどお皿に手をつけることなどできません。しかしお客が手をつけないと後の者がこまるとのこと、朝から脂汗をかきながらの形だけの食卓となった。身にあまる沢山のもてなしに深く感謝し、その家を出ようとした時だった。ご主人が私の枕元にあった品々をもってきて、「これはあなたのために用意したものです。身につけられないならば、荷物になって恐縮ですが家にお持ち帰り下さい」と言ったのです。私は涙が流れて仕方がなかった。誰がどうしてこれほどまでに他人を遇することができるのでしょうか。このことを、風習とか習慣という言葉でかたづけてはいけないと思う。旅人をその心の底からもてなすのが韓国の人々の心なのです。こんな人達を私たち日本人は、苦しみ、いじめからかしてきたのかと思ったら、どんな告発や糾弾よりも過去の歴史が深く鋭く私の心に刺さった。

経済危機で中断せざるを余儀なくされた韓国青年達のあぶらむキャンプ。少しは経済も上向きになってきたので、許されるならば2000年夏には実施したいと金牧師は語った。私も、日本の若者と共に韓国の人々の豊かな心に触れるプログラムをつくりたいと思っている。そして近い将来、韓日両国の若者が一緒になって、ベトナムでワーク、キャンプをしたいと考えている。何故って、日本経済は朝鮮戦争とベトナム戦争で大きくなり、韓国はベトナム戦争ではずみをつけたと言っても誤りではない。今、韓日両国の若者が、遅まきながらでもベトナムの人々と共に歩むことのきっかけをつくっていくことに、私は大きな意味があると思っている。そんな夢実現にむけて韓国側のパートナーができたことを、この2回の訪問での大きな成果と思っている。

つけたし…。私は“スルメ”が大好物。韓国ではいたるところ、屋台でスルメが売られている。通訳の人に値段をきいてもらったのがきっかけで、私のスルメ好きが韓国の人々の知るところとなった。いただいたおみやげ品はどれもこれもスルメばかり。大きな買物袋4袋を弥次喜多にしてきた。入国の際、税関人が変な目で私を見ていた。あれから丸2年たった今も、韓国の人々の心を味わいながら、しゃぶっている。「韓国の人って“スルメ”のようだなあ…」と思いながら。

あぶらむ〈遊び〉の舞台

内田 八州成

拜啓 あぶらむの皆様、いかがお過ごしでしょうか。

あぶらむから東京に帰って3週間。そちらそちらの美しい晩秋の風景が今もしっかりとからだに残っています。朝の陽射しをあびた野菜の緑、黒々とした畑の土。空は澄んで青く、遠くにそびえる雪の山なみ。黄、だいたい、レンガの色が鮮やかに山をそめる。すすきの穂はゆれて輝き、りんどうの花がひっそりと群をなす。裏のコナラの林にやって来る大きなきつつきアカゲラ。夕方の冷たい空気のおい、川の水音…。

そのひとつひとつを思いうかべるだけで、息が深くなってきます。そんな風景のなか、ほくはあぶらむの石がまでパンを焼かせてもらいながら、日を過ごしました。なんと満ち足りた時間だったことでしょう。

レーズンの酵母からパン種を育てて、それを使って家でパンを焼くようになってちょうど1年半ぐらいになります。少しずつおいしいパンになってきたかな、と思うのですが、あぶらむで焼いたパンは、さらにひと味もふた味も違っていました。パン種も材料も、そしてレシピも変らないのに、どうしてそんなに違うのだろう。

やはり、なんと言っても、薪を使う石がまの力、ということがあります。わが家のガスオーブンでは、あんなふうには、こんがりきつね色にパンが焼きあがることは望むべくもありません。しかも、クープもきれいにひらき、外が固くて中は柔らかい。ほんとうに見事な仕上がりです。

けれども、どうもそれだけではないようなのです。というのも、例えば、こねあげ、発酵させたパン生地の状態ひとつをとってみても、もうどこか違うからです。柔らかくて弾力があるのです。触れてみると、ふかふかとしてうれしくなってしまいます。この違いはなぜなのでしょう。

このことを考えていて思いあたったのは、「台所」です。そう、パンづくりをさせてもらった、あぶらむの台所のことです。

ご存じのように、パンづくりは一日がかりの仕事です。計量などの下準備に始まり、こねや成形、生地を休ませるベンチタイム、二度の発酵などを経て、ようやくかまに入れることができます。発酵させている間は、湿度や生地の状態をこまめにチェックする必要があります。また、残ったパン種をもとに新しいパン種をおこすのも大事な作業です。手間と時間をかけてあげることで、初めてパン生地やパン種は自分の力でゆっくりと育っていくのです。

あぶらむの台所で仕事をしていると、みんながパンのことを気にかけてくれていることがよくわかります。誰かが「今日はどう？」とのぞきこんでいきます。成形や片づけを手伝ってくれる人、新しいパン種に手をあててじっと気を通してくれる人。そして、発酵のすすみ具合にあわせて大郷先生は石がまに火をいれる…パンは実にたくさんのケアを受けているのです。しかも、それだけではありません。台所では他にもいろいろなことが起きています。まな板をたたくほうちょうの音、大きなべからあがる湯気。声がいきかい、笑いがはじける。人が集まり、人が散っていく。活気と活力に満ちた時間、

しんとした静かな時間…こういうこと全てから働きかけられて、パン生地もパン種もその力を十二分に発揮することができたのではないのでしょうか。あぶらむで暮らす人たちのつながりが生み出すエネルギーやリズム。それがパンに生命を吹きこんだのだ、ほくにはそう思えるのです。

もちろんパンだけが生命を吹きこまれたわけではありません。このほく自身もまた、同じようにして、元気をもらいました。

ただそれが好きで、ほくはパンづくりを続けてきました。その好きなことを通して、新しいつながりへと自分がひらかれていく。そういうことがほんとうに起こるものなのです。うれしい驚きでした。人とのつながりのなかでパンを焼き、パンを食べる。それは大きな喜びです。そのことがほくを生き生きとさせるのです。

ほくはあぶらむで、ただ夢中になって、みんなと遊んで暮らしていただけなのかもしれません。そして、知らないうちに、自分のなかから生きる力を引き出されていったのでしょうか。もしそうだとすると、あぶらむは、豊かな自然のなかにある〈遊び〉の舞台、ということになりますね。

今日は庭に珍しい鳥がやって来ました。黒い顔にオレンジの胸、翼に白いライン。この間あぶらむで、愛媛から来ていたよしくんが「声だけは聞こえるんだけどなあ」と言っていた鳥、オスのジョウビタキです。いよいよ冬がやって来たようです。そちらでは、もう初雪が降ったそうですね。薪ストーブとほろ酔いの夜——とは言っても「麦茶」ですが、ほくの場合——を思いながら、筆をおくことにします。 敬 具

追伸：先日とうとう家の近くの福祉作業所へパン種を持って出かけてきました！少し緊張したのですが、まずまずのパンが焼けてほっとしました。初めの一步、ですね。



川をくだり



ジャングルを横切り



ヒマラヤの山々を目指す
ネパールの旅

2000年 第5回 子供から大人までのネパールの旅、参加者募集

期間 2000年3月25日～4月6日 お問合せ あぶらむの会

室田 進 著 「心のキャッチ・ボール」より

「甥さんの本もいいけれど、大郷先生の本はいつ出るのですか」。この夏、あぶらむの宿にいらっしやったご婦人から、手痛い一撃をいただいた。50才も過ぎると周囲にチラホラと、あの世に旅立ったり半身不随になったりと、考えたくない逃げまわっていた現実に直面させられる。いつまでも時間があるのではない。この辺でこれまでの歩みを本にしなければと思いながら、ご多分にもれず先送りの日々。今回も甥、室田進の「心のキャッチ・ボール」に登場願うこととなりました。

ホッペタに栄養

最近、体罰が話題になることがよくあります。私は、これについては、賛成でもなければ、反対でもないのです。ただ、この頃のように、体罰に対して、必要以上にピリピリしたり、全てが同じように扱われるのを見ると、何かすっきりしないものが心に残るのです。

私は、監督時代、選手に対してよくビンタをしたものです。おかげで、引退してから二十年ちかくたつのに、私の店のある総曲輪通りを未だに通れないのがあるほどです。振り返ってみると、ビンタする必要がどれくらいあったのでしょうか。

私が、グラウンドで真っ赤になって怒っているのを見て、練習を見にきた人が、「あんなに怒らなくてもよいのになあ」と、どれだけの人が思ったことでしょう。

普通、親はよその子が、悪いことをしても、あまり気にならず、それほど、腹がたたないものです。自分の子には、言わなくてもわかると思います。ただ、やる気を失う怒り方では、意味がないように思います。私は愛情の問題だと思うのです。

昔の先生の中には、泣いて怒った先生がよくおられたものです。最近、そんな話は、あまり聞かないように思うのです。

私は、監督時代に、ビンタをした選手には、練習が終わり、部室で着替えをしている時、必ず声を掛けるようにしていた記憶があります。

「今日のパンチは、効いただろう」

と、ニヤリと笑うと、選手もつられて思わずニヤリと笑うのです。

私は、選手の笑い顔を見て、内心ほっとするのです。体の疲れは、若いですから、一晩眠れば消えてしまいます。しかし、精神的な疲れは、その日のうちに取り除いてやらないと溜まるばかりなのです。

駒大の太田監督は、ビンタのことを、「ホッペタに栄養を与える」と言うんです。私に、言わせれば、ビンタをする時は、お互いの信頼関係がなければ意味がないと思うのです。魂と魂のぶつかり合いだと思っているんです。

あれは、私が中学三年の時に起きたビンタ事件でした。私は、練習で投手をしていた時、審判の判定に腹をたてて、

「投手なんか、やっとなんわいっ」

と、勝手に外野へ行ってしまったのです。

その時、打者のボールが飛んできました。が、とても短気でイライラしていたために、そのボールを足で蹴飛ばしてしまったのです。

それを遠くで見ていた当時の中島泰昭先生は、それはもの凄い形相ですっ飛んで来たのです。私は、「これは、やられるなあ」と、覚悟したのでした。往復ビンタを何パツ食らったのでしょうか。その時の中島先生の言葉が、私の心に突き刺さったのです。

「室田、ボールはおまえの魂だぞ」

私は、力一杯のビンタを受けたのですが、頬の痛みよりも、自分のしでかしたことへの悔いが、長く尾を引いたのです。

私は、高校、大学と野球を続けました。特に、駒大一年の時は、球ひろいを朝から晩までしたものです。その時は、皆、疲れてかがむのもイヤになり、足で球を転がすので

す。でも、私は、どんなに体が疲れていても、足でボールを転がすことが出来なかったのです。足で球を扱うなんて、頭よりも体が拒否するのです。太田監督の言うところの、ホッペタに栄養が入ったのかもしれませんが。

月日は流れ、私の娘が富商に入学した時に、御縁なのでしょうか。あの中島先生にお世話になったのでした。

最後のキャッチボール

父は野球が大好きでした。三十歳を過ぎてから、初めてボールを握ったという、遅咲きではありましたが、抜群の体力を活かした、左腕から繰り出す癖球は、かなりの力を秘めており、草野球ではかなりならしたものです。

そんな父の影響を受け、私も小学生の頃から、どれだけのキャッチボールをしたでしょうか。父は当時、とんかつ屋を営んでおり、店が暇な時に食事に行こうものなら、相手かまわずキャッチボールの相手をさせられたものでした。その投球数は半端ではなく、三百球くらいは平気で投げ続けるので、球を捕る方はたまったものではありません。

「おやっさん、もう勘弁してくれ」

「何言っとんが！ やっと球が走ってきたところながに!!」

そんな会話が、何十回、何百回あったのでしょうか。何せ、軍隊一のスタミナと負けん気で、

「三百球投げないと、調子が出ない」

と、言うのが口癖でした。

そんな父と、どれくらいのキャッチボールをしたでしょうか。私が二十九歳のある日、父から電話がかり、

「今すぐ、店へ来い」

とのこと。私はピンと来ました。案の定、用件はいつも通り「キャッチボールを一緒にしよう」でした。

「最近、捕る奴が下手くそで気持ち良く投げられん。やっぱお前が一番だ」
などと言いながら、いつものように投げ始めたのです。その時、私は、

「待てよ、果たしてこれから先、何回、父の球を捕ることが出来るのか」

と、ふと思ったのです。不思議な思いでした。ただ、ただ、捕るのがイヤでたまらず、いつも早く終わることしか考えていなかったのに、なぜそんなことを思ったのか、今でもわかりません。しかしその時は、

「よし、今日は心を込めて、一球、一球、捕ろう」

と思い、

「親父、ナイスボール!!」

「球が走っていて、とてもいいぞ!!」

などと、何度も何度も声を掛けました。父は嬉しそうに、

「やっぱり捕球がいいと、調子も出るわい」

と言いながら、七、八十球も投げたのでしょうか。突然、

「今日はもうやめようか」

と、父が言ったのです。

そんなことは、この何十年間、一度もなかったことなので、私が、

「まだまだ投げていいよ。これから調子の出るところだねか」

と言うと、

「いや最近体の具合が何かおかしくて、腹は減らないし、何を食べてもうまくないわ」
と答えたのでした。

それからしばらくして、病院に検査のため入院した父は、二度と私とキャッチボールをすることはなかったのです。

幼い頃から、どれだけの球を投げ、どれだけの球を捕ったことでしょう。しかしなが

ら、本当に心を込めて球を捕ったのは、最後の一度だけなのです。何ということでしょうか。

父は私に、よくこんなことを言いました。

「進、世の中で一番辛いことは、金を儲けることと、死の病だ」と。

最後のキャッチボールが五月の初め。亡くなったのが七月二十三日。亡くなる三日前、父はベッドの上でしばらく出すように私に、

「進、お前によく、金儲けと病は一番辛いと言ったが、病と比べると、仕事の辛いことなんか、遊んでいるようなもんだわ」と、言ったのです。

父が子に残す言葉とはどんなものでしょう。また、どれだけの思いが伝えられるものでしょうか。

私は父の後を継ぎ、二代目として、とんかつ屋を営んでおります。店が忙しく、皆辛そうな顔になってくると、

「仕事の辛いことなんか、遊んどるようなもんだわ」と、つぶやいた父の顔が浮かんでくるのです。

地元「岐阜新聞」の「素描欄」に、拙文を寄せることになった。

自分を、あぶらむの会づくりにかり立てていったものは何だったのか、しばし自分のこれまでをふりかえるよき黙想の一時が与えられたようでした。ご笑読下さい。

あぶらむの会代表 大郷 博

出会った旅人Ⅰ

いつの世も、「人生の達人」といえる人がいる。私にとってそんな人は、沖縄にあるハンセン病（ライ）療養所「愛楽園」に生きる人々だった。

その一人、タケさん九十二歳。病気と生活苦で失った手足は大きな勲章に見える。彼女は十六歳で発病、家族全員がつらい仕打ちを受けた。幾度も自殺を考えたという。しかし、不自然な死は家系を汚す、これ以上迷惑はかけられない—と思いとどまったという。

十八歳で家を出、二十八歳までの十一年間、人里離れた海岸近くの山中で独り暮らしをした。夕暮れ時が一番寂しかったという。そして、何よりも怖かったのは「人間」であったという言葉に胸が痛んだ。

片足義足のタケさんは「私の足、一足先に天国へ行ったよ」と言って、私たちを笑わせる。人生のつらさを笑い飛ばすかのようなその一言。しかし、その言葉を口にするまでに、どれだけの涙を流したことだろうか。

そんなタケさん、「人生、転ぶこともあるよ、転んだら起き上がりなさいね」と私を力づけてくれた。その一言は私にとって大きなカルチャー・ショックだった。なぜなら、それまでの私は「転ばぬ先の杖」とばかり、その杖を太く確かなものとするために汲々としていたからである。「人生の良き旅人・達人」と呼ばれる人は、「転んだら起きる」という単純な道理を身に付け、淡々と生きている人たちだった。

ギリシャ語で「人間」を「アンスローボス」という。それは、アンチ（抵抗する）とレポー（沈む、屈する）という語からできている。人間とは、打ちひしがれて沈むことに抗する存在である。人生「転んだら起きる」。これこそが人間であり、旅人である。タケさん、ありがとう。

出会った旅人Ⅱ

「痛み経て真珠となりし貝の春」。こんな句を残して一人のハンセン病（ライ）を病んだ人が逝った。沖縄救癩の父、青木恵哉師である。遺体を移す時、ベッドの中に義足

だった片足がポツンと残っていた。忘れられない光景である。

明治四十年、旧ライ予防法のもと、全国に療養所がつくられた。しかし、沖縄では地元の反対が強く、当時の国の力をもってしてもできなかった。

世界大恐慌前夜の昭和四年、病友の窮乏を知った師は沖縄に渡り、療養所づくりを開始した。国家でさえできないことを一民間人が、それも病気を病んでいる人が…。焼き打ち、殺人未遂、師への迫害はすさまじかった。「魚ならば海に潜りて生きん。鳥ならば空に上がりて逃れん。五尺のからだ置き処なし」。これは当時の師の心境を詠んだものである。

旧ライ予防法施行三十年後の昭和十三年、国立療養所「沖縄愛楽園」が誕生した。世界広しといえど、一病者が命を賭してつくったのはここだけである。

そんな師が人生の旅路の終わりにあたり、生きることへの気づきとして「痛み経なさい」という。未だ二十歳そこそこの私に師は、中途半端に悩み苦しむのではなく、それらとしっかりと向き合い、悩み苦しみを抜くことの大切さを語られた。

女性の胸元を美しく飾る真珠。その輝きは、傷口を癒すために分泌された体液による貝自身の癒しの業である。そんな真珠貝に自分の人生を重ね、師は「痛み経て」と語る。

よく人に私のエネルギーの出どころを尋ねられる。私にとってのそれは、このような「人生の良き旅人」との出会いである。彼らはこの世にいらなくても、私に力を与え続けてくれている。生きる上での一番大きな財産と思っている。

旅の写真

私はカメラが好きである。思ったような写真が撮れないとすぐカメラのせいにして、また別のやつを物色する。そんな浮気性をカメラが批判するのか、いつまでたっても上達しない。

旅に出た時などよく撮りまくる。旅の感動を記録し、周囲の人にも伝えたい。しかし撮りながら、この写真で本当に感動を他人に伝えることができるだろうかと思う。そんな時、私はいつも沖縄での一つの体験を思い出す。

私が二十歳過ぎのころ、地元の人に誘われ、釣りに出た。東シナ海に沈みいく夕日と、その後に続く壮大な夕焼けの美しさ。ハワイでもフィリピンでも、あんな美しい夕焼けを見たことがない。あまりもの美しさに釣り糸を垂れることも忘れて見とれていた。

そのころ、私はある人にひそかな思いを寄せていた（残念ながらわが妻ではない）。その人にもこの光景を見せたい！この感動を伝えたい！どうすれば伝えることができるのか。手元にカメラもない。また、どれだけ言葉を尽くしてもこの美しさや感動を伝えることは不可能だ。でもどうしても伝えたい！

その時、一つの考えが私の心を横切った。「そうだ、この美しさに打たれて自分が変わることだ」。そうすれば「なぜあの人は変わったのだろう。沖縄の美しい夕焼けに出会ったからと言っているが」。私が人間的に変わる（成長する）ということによって、初めてその人をして「人を変えるまでの夕焼けの美しさって、どんな美しさだったのだろうか」と、私が打たれた夕焼けの美しさや感動を追体験することができるということであった。

「感動」は心の地殻変動。自分が変わるということは、写真よりも雄弁に旅を物語る。人生旅路のアルバムを感動で飾りたい。

あぶらむ雪祭り・元気な子大集合!!

2000年1月22日、23日

ソリ、雪上散歩、雪ダルマ、かまくら、雪合戦、おもいっきり雪と遊ぼう!

|||||||寄付者一覧('98年11月11日~'99年11月30日)|||||||||

東京聖テモテ教会奉仕会／菊地栄三／磯貝澄美子／田尾兵二／松岡和夫／祈りの家教会
／梅本洗／長田英子／山崎玲子／佐倉淑子／村松一郎／円居久枝／細川哲士／松岡秀子
／八代洋子／原川恭一／笹岡節夫／加倉井佳子／尾崎和廣／林正和／嘉数弘子／渡辺隆
／杉山千鶴子／村岡薫／岩田牧夫／五百蔵久子／中村ひろ子／久田広子／門田圭介／逸
見操／小島誠司／石原つや子／熊谷一綱／西依彩／東晃・璋子／森田トミ／萩原康宏／
山崎俊樹／服部あや子／財満研三郎・由美子／中村正克・啓子・真紀／坂本吉弘／高島
光江・富美江／朝比奈誼・時子／木村富昭・秀子／草壁文恵／倉敷千恵子／金城由美子
／岸井孝司／長尾文雄／森本光生／水野洋子／森田喜之／高瀬留美／倉石昇／池崎純一
／木村繁・秀子／荒井優仁・彩月／稲垣昌子／池袋聖公会／荒川紀子／浦和諸聖徒教会
／日本基督教団各務原教会／市川聖マリヤ教会／葛飾茨十字教会／京都復活教会／金子
美弥子／市井 紀子／水戸部賀津子／工藤真喜子／渡辺直明／安斉勇夫／松本信代／石
井秀夫／岡登正子／遠藤哲／小野成子／小笠原すわ／中部学院大学中部女子短期大学宗
教委員会／畑井正春／本間勇吉／名古屋学院大学宗教部／鈴木茂男／掛川尚子／鶴川雅
行／中島弘一／木曜会／松山奈津子／佐々木優／小金井聖公会／河野正司・まり子／小
林賢三・佳子／小林綾／小倉恵美／下田英一／小林理子／岡田斉／千葉復活教会／鈴木
正士／深澤千恵子／斉藤恵子／柳川ハル／島田信弥／福田詩郎／越田信／中村芳枝／梶
原恵理子／吉河佳代子／児玉こずえ／松井明子／山岸勇一郎・悦子／佃寿子／常見幸代
／上田敏明／増山ふみ子／笹部昭博／坂口玲子／清水秀明／形部賢／尾崎嘉代子／野田
修治・洋子／大久保孝一／池田世起子／山田益男／東野光男

|||||||新規会員('99年11月30日現在)|||||||||

飯田昭正／下堂前英一／伊東勇／金子順子／大城豊次／金子内科診療所（金子秀夫）／
井口諭／酒井興三／沢野都／草壁文恵／踊一郎／松山和弘

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。